

牧師所感：

老人牧師の若き日の回想

旧約聖書の箴言五章を読む内に 特に 21 節のみことばが目止まった。21 節のみことばは「人の歩む道は主の御目の前にある。その道を 主はすべて計っておられる」

私は大学卒業後、大志を抱いて、声楽の勉強の為に日本で名の通っている国立音楽大学^{くにたち}へ仮留学生として来日した。しかし 本当の留学生になる為には、4 月 6 日（1966 年）に正式の試験を受けねばならなかった。ところが志が変わって、上野にある 東京音楽大学へ足を運び、当時 韓国の音楽大学で名が知られている有名なバリトンの声楽教授 中山 悌一先生を訪問し、入学の為に来たことを告げた。先生は私の訪問を聞き、即座にピアノに向かい課題の歌を歌えと命令するのであった。私は ヴェルディ 作曲のラ・トラヴィアータ（椿姫）の歌曲ゼルモンの歌を独唱した。歌った後 30 分 待たされた。30 分後 先生は「申さん、2 年生に入れてあげよう」とおっしゃった。私はキョトンとして「先生、私は韓国で大学を卒業しております」「私も大学院の試験を受けるようにして下さい」と懇願した。すると先生は、「申さん、大学院は無理です。なぜかと言うと、うちの大学院に 6 名が学部から志願しているし、大阪、その他の地方からも志願しているので、あなたは日本に入学して間もないし、黙って 2 年生に入りなさい。あなたはとても無理です」と言って諭された。でも 私は先生の提案を受け入れず、応試して見事に落ちた。その後、私は神の配慮により、国立音大から東京神学大学へと転校して、牧師となったのである。さて、牧師として晩年を迎え、死を前にして思うことは「人の歩む道は主の御目の前にある。その道を 主はすべて計っておられる」ということ。ところで 齢 92 の年を生きる私は、今も主が私の人生を計っておられることを痛感している。

おわりに、神に栄光がありますように 祈ります！！